

子どもたちの明日



CARING FOR YOUNG REFUGEES
幼い難民を考える会



目次

特集	訪問活動の6年間	2
	ボランティアの訪問を受けて……サイヤパシェット・ワンナパー(ラオス)	
	訪問のむずかしさを知る……相川明子	
	訪問から学んだこと……後藤今日子	
タイ最新情報		6
	タイ被災村保育園調査報告	
	カオイダン難民キャンプついに閉鎖	
かわら版		8
	「KACCS フォーラム93」でカンボジア活動報告	
	胸打たれた親子の笑顔	
平和はいつ来る		12
	カンボジアに帰った難民のその後……上田広美	
アンテナ——関西発／岡山発／福山発		14
ボランティア活躍中		16
みんなの広場・読者便り		18
僧侶が歩けば・その5		20
CYR昨日・今日		22
「いただきます」		24

訪問活動の6年間

——日本社会は開かれたか？——

1987年春、C Y R (幼い難民を考える会)では、インドシナの人を訪問し、日本語学習、子どもの勉強の補習に協力する活動を始めました。当時と比べ、6年後の現在、外国人をとりまく状況は、少しずつではありますが、変化してきたようです。その1つの表れが、インドシナの人たちが多く住む神奈川県内のボランティア団体の増加です。地域の人たちへの橋渡しをし、開かれた地域社会をめざして行ってきたC Y Rの訪問活動は、しめくりの時期を迎えたようです。



日本に定住し、真剣に日本語を学ぶインドシナの人たち

訪問を受けて

●サイヤパシェット・ワンナパー (ラオス)

ラオスの首都ヴィエンチャン近郊出身のサイヤパシェット・ワンナパーさん (27歳) が日本に来たのは1985年、19歳のとき。働きながら夜間中学に通い、その後も進学を志しましたが、アパートから遠いため断念。

もっと日本語を覚えたいと思って、C Y Rから訪問ボランティアの紹介を受けました。約2年間の訪問ボランティアの感想を尋ねると、開口一番「出会えて楽しかった」との返事が戻ってきました。「仕事 (ボランティア) で来てるから、へたな日本語でもちゃんと理解しようとしてくれて、それがすごくうれしかった」とのこと。今まで出会った日本人で、めんどくさくさらずに話を聞いてくれる人はあまりいなかったからです。また、遊園地やさまざまな催し物に連れて行ってくれたことも楽しい思い出になっています。日本語の習得以上に「友だち」とし

て接してくれたことが、慣れない日本の生活での励みになったようです。困ったことや相談事にも気軽にのってくれ、日常触れる日本人と違って、何でも率直に話せたのがとても良かったとのこと。今では話すことにほとんど不自由しないサイヤパシェットさんですが、本音と建前の日本で、言いたいことを言うことのむずかしさを痛感しています。思ったことをそのまま言っても気にしないラオス人に比べて、「太ったね」とか「おばさん」という言葉を嫌う日本人の感覚はわかりにくい。「日本人と付き合うのはむずかしい。でもボランティアの人は文化の違いをわかってくれるから話しやすかった」と言います。3年前に訪問ボランティアが終了して「今は全然勉強してないの」という彼女ですが、もし、また訪問ボランティアが来てくれたら、漢字の読み書きや日本社会の構造、習慣などを教えてほしい、と瞳を輝かせて話すサイヤパシェットさんです。

C Y Rの訪問活動 (=訪問ボランティア) はタイのカオイダン難民キャンプで働いていたス



People of Indochina seriously learn Japanese.

スタッフは、帰国後、日本に定住したカンボジア人を訪問したのがきっかけで始まりました。

出発点が、友人関係ということもあり、単に日本語「教える一教わる」関係ではなく、友だちとして対等に付き合いながら、その中で日本語を身につけてほしいと願って活動を続けてきました。サイヤパシエットさんは、ボランティアが友だちとして接したことを喜んでくれます。友人関係の中で日本語を覚えるという点で、成功した例といえるでしょう。

しかし、この方法は、ある程度日本語が話せる人には有効でしたが、基礎から学びたい人にとってはどうだったのでしょうか。ある、訪問を受けていたインドシナの人は、母国語でこう言っています。

「とても熱心に教えてくれましたが、教え方が系統的でないので、わかりにくかった。早く、日本語を覚えたいと思っていたのに、あまり上達しなかったですね」

訪問を希望する人の日本語のレベルに合わせた、きめ細かい対応が必要だったと反省させられます。

6 Yrs. of Service for Foreigners Is Japanese Society Open to Them?

CYR(Caring for Young Refugees)staff have visited Indo-Chinese people living in Japan since 1987 to help them study Japanese and other subjects. Their situation has gradually changed since then. One example is a rising number of volunteer organizations in Kanagawa homes for many Indo-Chinese people. CYR's activities, aimed at arousing local people's interest in creating a community more open to these foreigners, seems to be at last bearing fruit.

Impression of Visit

Vannapha Sayyapasith

Vannapha Sayyapasith, came to Japan in 1985 from Vientiane, Laos. She worked by day, attending junior high by night. She wanted to advance to senior high, but gave up the idea eventually. Eager to be better at Japanese, however, she decided to learn from a CYR volunteer at home. She was satisfied with two yrs. of experience, because the volunteer tried to understand her poor Japanese, unlike other people who were reluctant to talk with her. They went to amusement parks and various events together. She was particularly encouraged by being treated as a friend in an unfamiliar situation. She also received advice on any trouble encountered. She now has little difficulty speaking Japanese, but is still embarrassed by the distinction between surface principle and hidden true intention, often seen in Japan. She felt at ease with the volunteer, though, who understood the cultural differences. Although the program finished three years ago, she says if she has a chance again, she would like to study new fields like kanji.

CYR staff back from a refugee camp in Thailand visited Cambodians settling in Japan in 1987, marking the start of this volunteer program.

Therefore, they were on equal, and not on teacher-student terms. Ms.

訪問のむずかしさを知る

●相川明子

ベトナム人の一家4人の訪問を1989年の冬から2年間行いました。父親はその8年前から日本に定住、呼び寄せ家族は妻と娘2人。娘たちは中学1、2年に編入しましたが、当時18歳と16歳でほぼ大人に近く、しかも国際理解教室があるということで地元から少し離れた中学に通っていたため、居住地域との交流は希薄になりがちでした。団地での運動会、もちつき会などの回覧板が回っていましたが、そういう催し物に出席するのは億劫らしく、私も彼らの住まいから車で40～50分と遠かったため、地域の中で共に行動することができませんでした。

両親は仕事場ではほとんど日本語を使っている交流はないらしく、休日は家で休んだり、親戚や同国人の友だちと付き合ったり、ベトナム料理の材料買い出しなどをして気晴らしをしているようでした。腰痛、頭痛、不眠症、生理不順などを訴え、ストレスが多いと察せられました。初めは私も自宅に招待したり、いっしょに外出しようと考えていましたが、あまり無理強いして彼らを引っ張り出すのは、彼らの生活の安定には逆効果のように思えました。両親は、できればいずれ本国へ帰りたいようだし、娘たちは多分親戚もいて、日本よりは外国人が住みやすいアメリカへ渡りたいようでした。それを考えると、どこまで日本の暮らしに染まるべきなのかわからず、強要はできませんでした。

私の家よりたくさんの電化製品を取り揃えたホーチミン市出身の都会派の彼らに対し、私は文明の利器をなるべく減らし、土に親しむ簡素



な生活を志すちょっと変わった日本人。医者や薬を頼らず、食品添加物等をなるべく廃し、健康的に体を動かすことなどを折りに触れて勧めてきました。漢方薬を使うように変わってもきましたが、暮らし方にまで踏み込むのはなかなかむずかしいことです。定期的な訪問を終えても気長にずっと付き合っていけたら、彼らもうちょっと肩の力が抜けるのでしょうか。

訪問から学んだこと

●後藤今日子

私が川口市柳崎団地で訪問ボランティアを始めて6年になります。きっかけはCYRから高校生の家庭教師を頼まれたことでした。初めは忘れていた数学や英語の知識を呼び戻すのに必死でしたが、彼女の高校生活の話や暖かな家族関係に触れ、月2回の訪問が楽しみとなりました。その後、同じ団地でJVC（日本国際ボランティアセンター）のボランティアが同様の活動をしていることがわかり、何度か話をするうちにお互いのボランティア不足を教室形式で解消しよう、との提案がなされました。

地元、川口市の広報などでボランティアを呼びかけ、今では、母親・老人のための日本語のクラス、子どものための勉強クラス、父親を中心とした新聞クラスがあり、6人のボランティアが分担しています。2ヵ月に一度のボランティア・ミーティングは老若男女、個性あふれる逸材(?)がそろい、にぎやかな集いとなります。そして、何より楽しいのは、カンボジアの友人たちとのおしゃべり、「異文化交流」です。

「やし酒ってどうやって作るの?」「このお料理には何が入っているの?」日本語学習の手伝いという名目をはずれた私の質問に時に真剣に、時に楽しく彼らは答えてくれます。

柳崎団地で暮らすカンボジア人は日本の生活が長く、何事にも積極的です。年1回の交流会には同郷の友人たちだけでなく、職場の日本人の同僚や団地の管理人さんを招待する。近くの公民館から文化祭への参加を呼びかけられたときは、アルミの弁当箱やアブサラ(天女)の飾りがついた灰皿を展示に出品し、熱心に説明する。それがきっかけで知り合った公民館の館長から日本語教室新設の案内を受けて週1回の授業に通い、異国の友人を増やす。本当にその姿はたくましく、私にとってもいい刺激となります。——私もがんばらなくっちゃ…。この6年間の多くの人との触れ合いの中で、私は「何か教えてあげよう」と意気込んでいた訪問ボランティアから、楽しくアジア生活学(?)を学ぶ学生へと変化したような気がします。

この6年間に、約70名の訪問ボランティアが約80家族を訪問しました。この数年は、訪問を希望するインドシナの人たちは減少しています。新しく日本に来た人たちのほとんどが家族の呼び寄せであることと、日本語を教える団体が増えているためと考えられます。

今後CYRでは、新たに訪問の依頼を受けた場合、地域の団体を紹介し、地域に団体がない場合のみ、住まいの近くのCYRの会員、関係者の方をお願いしたいと思っています。

Soyyapasith is satisfied with friendships and their study of Japanese proved a success.

Though effective for those with a certain level of Japanese speaking skill, this method might be difficult for beginners. Speaking in native language, one person said the method was not systematic enough, for study. Programs in future should be worked out, according to the level of each person.

Facing Difficulties ————— **From Volunteer Akiko Aikawa**

I visited a Vietnamese family of four in '89 and '90. The two daughters, aged 18 and 16 then, attended a junior high outside their school zone, which had a class on intl. understanding. So they couldn't make friends with neighbor. They wouldn't attend events of their housing complex, though a notice was circulated. I couldn't attend these events together, either, as my house was not in the same district.

The parents hardly spoke Japanese at work. On days off, they stayed at home or spent time with compatriots. They complained of symptoms like headache and insomnia, due to heavy stress. At first, I tried to be with them as long as possible, but thought later it might adversely affect their stability. It seemed to me the parents wanted to return home in the future, while the daughters preferred to live in America. So I couldn't force them to get used to Japanese life. They are from Ho Chi Minh, used to an urban life, while I love a simple life in the country, unlike other people. I tried to dissuade them from using doctors or medicine easily, urging them to exercise more. However, it was difficult to interfere in their way of life, though they changed gradually. They could have felt more relaxed, had we continued our association as friends.





保育園の給食風景

Lunch time at the nursery



タイ被災村保育園調査報告 パライに続き2つの村で活動予定

CYR（幼い難民を考える会）は、タイ、プラチンプリ県アランヤプラテート郡8地区に点在する14の保育園について調査しました。この中には現在活動中のパライ村とノンヤブロン村も入っています。その結果、次のような問題点があることがわかりました。

①保育者の給与が低い。平均して500～1000バーツ。②今までUNBRO（国連国境救援団体）から各保育園に米、食料が支給されていたが、今年1月より中止された。米は半分が子どもたちへ、後の半分は保育者へ渡され、保育者は米を現金に変えることができた（約350～400バーツ／袋）。③乾期の水不足（4ヵ月間）④教材が不足し壊れているものが多い。品質も悪く、主にプラスチック製で保育者自身が作ったものは

ほとんどない。⑤全体の80％は保育園運営委員会が機能しておらず、村人の保育園への興味、関心、協力はない。⑥保育者自身、子どもの成長発達についての知識がなく、保育技術もない。⑦子どもの両親に幼児教育への関心、理解がない。UNBROからの援助がなくなり、保育料を引き上げたため、通園を止めさせる親が多い。が、保育料は1日当たり1～2バーツ程度で、村人は支払えないほど貧困ではない。⑧保育園および村全体が活気がなく、自分たちで村を良くしよう、問題点を改善しよう、といった意識に欠ける。理由の一つとして、10年以上に及ぶ長期の援助過多が考えられる。

以上の調査結果からCYRでは、新たにノンブルー村とタブリック村の保育園で協力活動を行うことになりました。

Survey on Nurseries New Activities Scheduled in 2 Villages

A CYR survey of 14 nurseries in Aranyaprathet, Thailand, revealed the following problems. Among them problems occurred, in nurseries CYR is helping those in Parai and Nongyaplong vils.

1. Low salaries for teaching staff(500-1,000baht); 2. UNBRO suspended rice supply in Jan, half of which teaching staff had exchanged for cash; 3. Water shortage for 4 months of dry season; 4. Material is poor both in quality and quantity; 5. Poor interest of villagers in nurseries; 6. Lack of teaching staff's knowledge on children's growth; 7. Lack of parents' interest in educating their children; 8. Villagers show no willingness to improve their village. This is partly due to excessive aid for over 10 years.

Based on these results, CYR has decided to help nurseries in Nongprue and Tap-phrik vils. instead.

Khao I Dang (KID) Refugee Camp Close at Last Remaining Refugees Went to Site 2

KID Refugee camp, where CYR has helped nurseries since '80, was closed on Mar.3. Most refugees returned home, while those who remained moved to Site 2.

Houses were destroyed or burned and piles of garbage were seen everywhere, making the camp like a ghost town. Some refugees must have hurriedly left their homes behind. Fire was burning their books, kitchen utensils, and even the very existence of the camp and its long history. I felt as if I heard the Khmer people crying in the burning flame. Beautiful flowers grown by the refugees showed a sharp contrast.

The closing ceremony capped the 13-year history of the refugee camp. Each of 199 refugees was blessed by a priest, then headed home by bus.

カオイダン難民キャンプついに閉鎖 残った難民はサイト2キャンプへ

1980年からCYRが保育活動を行ってきたカオイダン難民キャンプが、3月3日閉鎖されました。難民の大半は本国へ帰還し、残った人々(帰還登録をしていない人、妊産婦、病人、身障者)はサイト2キャンプへ移動しました。

キャンプ内の家々は壊され、ゴミの山がいたるところにできていました。また、あちこちで家が燃やされ、まさにゴースト・タウンのようです。メラメラと燃えさかる炎がかげろうを作り、カンボジアの人たちの姿が浮かび上がって泣いている声が聞こえるようでした。旅支度をする時間もなく、あわてて家から追い出された人もいたことでしょう。使い差しのなべ、釜、読みかけの本、ベッド…。キャンプの長い歴史もその存在もすべて消し去ってしまう炎。そのかたわらで、カンボジアの人が育てた花がそこそこに咲き残っていました。とても可憐で美しい姿でした。

閉鎖式では、関係各者からのあいさつの後、風船と鳩を放し、13年に及ぶ難民キャンプの歴史に幕を閉じました。この日、帰還予定の難民199人が一人ずつ僧侶から聖水を受け、バスに乗り込み、祖国へ向け出発しました。



Aranyaprathet
Office Moved
Aranyaprathet
office was moved
Dec. last year
with help from
staff like Masaki
Ioku of Okayama
Group.(Refer to
p.14)

アランヤプラテートの事務所が移転しました

昨年12月に、CYRアランヤプラテート事務所の引っ越しがありました。岡山支部から井奥雅樹さんが助っ人に現れ(本紙p.14でも紹介)大助かり。あれこれ出てきた備品はCYK(若い難民を考える会のカンボジアでの活動部門)、役所、小学校等に振り分けました。

CYR かわら版

栄養不良で目が見えなくなる!?

「KACCSフォーラム'93」でカンボジア活動報告

大勢の保育関係者が参加して神戸市三ノ宮で1月30日に神戸アジア保育交流会(KACCS)主催の第2回目のフォーラムが催されました。石垣恵美子聖和大学大学院教授による「幼児教育と国際化」の講演でおもしろかったのは、反差別授業の実践例です。肌の色が異なる子どもたちの中でいじめが起こったとき、みんなそれぞれ大切な存在なんだとわかってもらうために、みんなの手をお互い触ってみて、見比べてみて、みんな違うね、違った手を持ってるね、といって気づかせるのです。また、手がたや足がたをとったり、多民族のお人形をお風呂に入れさせたりして、やはり違いに気づかせます。そうするうちに違いを認め合えるようになるのです。

CYK(若い難民を考える会のカンボジアでの活動部門)スタッフのビムワリーさんと野村美知子さんから、スライドを交えたカンボジアでの活動報告がありました。離乳期の失敗が



Cambodian staff vividly describing children
カンボジア近況報告をする在ブノンベン・スタッフ野村とビムワリー

多く、栄養不良から失明してしまった子どもなどがいて、ご飯だけでなくタンパク質やビタミン類も必要だといった知識の普及が大切とのこと。また、トイレというのは子どもたちにとって新しい習慣で、戸を閉めると暗くなるので初めは怖がっていましたが、だんだんと慣れて「これからトイレに行ってくるからね」なんてわざわざ言ってから行く子どもがいるとか。参加者にとってはクメールっ子のたくましい姿、明るい表情といった面は新鮮だったのではないのでしょうか。

数人の留学生たちの母国の遊びを参加者と一緒にやってみるというイケイケお笑いコーナーでは、すっかり盛り上がりすぎてしまいました。これは、いろんな文化的背景、年齢の人たちと楽しめるいい試みでした。たとえば、私は国産牛になって鼻息も荒く闘牛士と渡り合うハメになったのですが、これも異文化交流といえるのではないのでしょうか。(小川輝樹)

胸打たれた親子の笑顔

報告会「カンボジア・子どもたちの明日」

去る1月26日、飯田橋のエコロジー・センター地下の会議室で、カンボジア国内で昨年12月から始められた農村の子どもたちの保育活動に従事する2人のCYRカンボジア・スタッフ、ビムワリーさんと野村美知子さんによる「カンボジア・子どもたちの明日」と銘打った現地報告会が行われました。スライドを使って、首都プノンペンの現状、CYRが担当する2つの村、プノンペン特別市ダンカオ地区にあるサムロンクロム村とカンダール県カンダールスタン地区にあるプレイタウ村の現状について報告されました。また、始まったばかりの両村での保育援助活動について、活動当事者の熱のこもった説明が行われ、第一線で働くスタッフの人たちの人種、国境を越えた献身的な活動に大変感銘を受けました。

タイ人スタッフのビムワリーさんからプノンペンの現状が紹介されましたが、UNTAC(カ



Encouraging smile of children
(day nursery in Prey Ta Touch vil.)

ンボジア国連暫定統治機構)の活動によって各派軍隊の武装解除が進んだ結果、失業者が増え、逆に治安が悪化していること、UNTACあるいは各国からのPKO(平和維持活動)の駐留がインフレを加速させていることが紹介されました。第二次大戦中に青春時代を過ごした私たちの年代には、終戦直後の進駐軍占領下の日本の姿と二重写しに見えました。この状況はカンボジアにとって、その先にやってくるであろう安定と発展の時代へ向かうために通らなければならない一つの苦難のステップのような気がします。これがカンボジアの人々にとって、再び苦しみ時代の始まりとならないことを切に祈りたいと思います。

また農村では、人々は自然環境をあるがままに受け入れていること。仏教の信心が深く、前世からの因果応報を信じ、現実の苦しい日々の生活も前世からの応報と受けとって、自分たちの運命と考える人たちが多くと説明されていました。こうした現地の人の人生哲学を理解することも、援助の手を差しのべる際に、大変大事なことに思えます。

野村美知子さんの報告では、現地の保育活動は日本でのように保育のカリキュラムを考えるより、「健康で仲良く、みんなで楽しく過ごすこと」が最大の目的と語っていました。日本の子どもたちよりもたくましいという言葉が印象的で、「カンボジアの子どものことを考えることはまた、日本の子どものことを考えることです」とCYRのリーフレットに書かれた言葉を実感を持って思い出した次第です。それにもまして、スライドで写し出された貧しい農村の親子の素晴らしい笑顔に胸打たれました。

(交野政博・理事)

Report on Activities in Cambodia at "KACCS Forum '93"—Teruki Ogawa Eyesight loss from Malnutrition?!

2nd KACCS Forum was held on Jan. 30 in Sannomiya, Kobe, attended by many people from the nursing field. Prof. Emiko Ishigaki of grad. school, Seiwa Col., delivered a speech, "Child Education in time of Internationalization". I was particularly impressed with her report on how children are educated on desegregation in classes. For instance, when a child of a different skin color was bullied, a teacher made the children touch each other's hands to make them recognize mutual difference. In another case, children took a bath with dolls representing different races. Thus, they can learn the importance of accepting people of different races.

Meanwhile, Pimwalce Nisawattananan and Michiko Nomura, both CYR staff, made a report on their activities in Cambodia. According to their report, failure at weaning time often causes malnutrition among children, some of whom eventually lose their eyesight. They stressed that local people should learn to consume food containing protein and vitamins, besides just rice. Meanwhile, using a toilet was a completely new experience for children. They scared at first, but gradually got used to the new habit. Indomitable spirit of local children with a cheerful face certainly impressed the participants.

We got really excited at an entertainment corner, where several foreign students introduced games of their own country and then we tried them together. We had a good time with people with different cultural background and of different age. I myself joined a game of bullfight. This may be one form of cross-cultural exchange.

Empty Cans Collected by Saitama Children Helped Cambodian School

A donation of ¥13,000 was given to a primary school in Samrong Khrom vil., Dec. 17 last year, by Omiya Municipal Higashi Miyashita Prim. School. It was for building a fence to protect a vegetable garden in the school grounds from cows. These vegetables are grown by children and served at school lunch so they can be better nourished. However, the place is feared to be a feeding place for cows, which are usually left at large in Cambodia. The fence

空き缶集めて、募金活動

埼玉の小学校からカンボジアの小学校へ

昨年12月17日、埼玉県大宮市立東宮下小学校からCYRに13000円が寄付されました。早速、CYRが活動するカンボジア、サムロンクロム村にあるテッカボンヨ小学校に贈られ、校庭の野菜畑を牛から守る柵を作る費用に充てられました。野菜は子どもたちの栄養改善のため、子どもたち自身の手で世話をし、給食に使われます。そこで問題なのが、牛。カンボジアでは牛は放し飼い、勝手に草をむしゃむしゃ食べ尽くしてしまいます。せっかく育てた野菜も被害にあうおそれがありました。でも、東宮下小学校から贈られた寄付金で「柵」を作れば、その心配もなくなります。

東宮下小学校は文部省帰国子女教育研究協力校で、中国帰国孤児子女や台湾・ベトナム・カンボジアなどの外国人子女が日本人の生徒と一緒に学んでいます。今回「空き缶を集めて、カ



Vinyl bag full of collected cans
集められた空き缶でビニール袋は満杯

ンボジアのお友達と手をつなごう」というキャッチフレーズで行われた活動は、国際理解教育と環境教育の一貫として取り組まれたもの。空き缶の投げ捨てから身近な環境問題に目を向け、さらに空き缶を売った収益をカンボジアへ贈ることで世界の子どもたちの状況を知るきっかけになれば、と授業で取り上げることにしました。カンボジアを対象としたのは、学校にカンボジア人の生徒がいて身近な友だちとして日常関わっていること、カンボジアで長く戦争が続く、人々が今も苦しんでいること等が挙げられ



Empty cans even at riverside
川辺にも捨てられた空き缶が

ます。

授業で地球環境問題、カンボジアの現状を学んだ後、全校総会で「空き缶集めとカンボジアの子どもたちへの援助」が決められ、10月17日から12月17日まで空き缶集めが実施されました。家庭で出た空き缶や、道端で拾った空き缶等々、集まった空き缶、ナント、400キロ！子どもたちの努力と熱意のこもった13000円です。東宮下小学校の子どもたちの心が、テッカボンヨ小学校の子どもたちに伝わり、柵を通じた交流が始まることを願っています。次に紹介するのはそれぞれの学校からの手紙です。

●東宮下小学校からテッカボンヨ小学校へ

テッカボンヨ小学校のみなさん、こんにちは。テッカボンヨ小学校では今作物を作っているそうですね。ぼくたち東宮下小学校は、10月から空き缶集めを始め、少しでもみなさんのやくだたってもらおうとがんばっています。まだ空き缶集めをしてから少ししかたっていないのであまりお金はたまっていないけど、さくを作ったりそのほかのものに、このお金をやくだてて下さい。ぼくたち東宮下小学校の子どもたちはこれからも空き缶集めをします。そして、これからもみなさんのやくだたいたいと思っています。みなさんの学校で作物がとれることを心より願っています。おからだを大事にし、これからもがんばって下さい。

●テッカボンヨ小学校から東宮下小学校へ

私たちは東宮下小学校にたくさんのすばらしい友だちができたので、とてもうれしくわくわ

くしています。

親愛なる皆さん、まず初めに皆さんがお元気で過ごしていられるかどうか伺うことにします。皆さんが元気でいらっしゃるように願っています。私たちはまあまあ元気です。でも、戦争が続き、これまでありとあらゆるものがめちゃくちゃになってしまった国に生まれたことを悲しく思います。皆さん、私たちの学校はとてもお見せできるようなものではありません。ぼろぼろで屋根は雨漏りがするし、床には穴が開いているし、机も椅子も壊れているの。一つの机に5人から10人の生徒を詰め込んでいるのです。勉強はあまりはかどりません。勉強だけでなくお父さん、お母さんの仕事を手伝わなくてはならないからです。20年以上も戦争が終わらないので、私たちはとても貧しいのです。

皆さんがお金を貯めて私たちを援助してくれるのだと伺って、私たちは皆とても喜んでます。首を長くして待っています。今年度はCYKのおかげでノート、ボールペン、鉛筆をいただくことができて少し楽になりました。しかし、物価が高いので、着るものなどまだまだ不十分なばかりです。皆さんからは野菜園のプロジェクトにも援助をいただきました。おかげで牛が入り込んで野菜を食べてしまうのを防ぐための柵を作ることができました。皆さんには何とお礼を言ったらいいのかわかりません。

最後に、皆さんの上に神様の御加護と健康と学業成就とがおとずれますよう、お祈りいたします。

カンボジアのサムロンクロム村テッカボンヨ小学校からのお礼の便り
A thank you letter from Cambodian primary school students.



would despel this worry.

Higashi Miyashita School cooperates Educ.Ministry's program to study how to educate return students. Children of different nationalities, China, Taiwan, Cambodia etc., attend classes with Japanese friends. The campaign this time with the catchphrase "Collect empty cans for Cambodian children", is part of the education on internationalization and environment. It is aimed at arousing children's interest in environment problems in daily life. Cambodia was chosen because some foreign children there are from Cambodia, where people are still suffering from a dragging war.

The campaign was held between Oct. 17 and Dec.17. 400kg of cans, worth ¥13,000 was collected. I hope local children will understand the effort and dedication of Japanese children, resulting in a start of international exchanges. Following are letters written by pupils of each school.

From Japan to Cambodia

Dear friends:

We hear you grow vegetables in the school grounds. Here in Japan, we have been collecting empty cans since Oct. to be of some help for you. We hope you will use our small donation for building a fence and for other purposes. We will continue this campaign in the future. I hope you will have a good harvest. Please take good care of yourself.

From Cambodia to Japan

It is really exciting for us to have many Japanese friends. Our school is shabby indeed. With leaks in the roof and holes in the floor, 5 to 10 children share one desk to study, though most of them are broken. We cannot concentrate on study, for we have to help our parents at home. We are very poor because of war lasting over 20 years.

You wrote about future donations, which we would greatly appreciate. CYK donated notebooks, ballpoint pens and pencils this year. However, prices are high and we are still short of everything. Due to your donation, we could build a fence to protect our vegetables from cows. We cannot find the right words to thank you. May God bless you.

平和はいつ来る *Any Hope at Home?*

カンボジアに帰った難民のその後

上田 広美
Hiromi Ueda

5月の総選挙をひかえ、約35万人の難民が祖国へ帰りました。帰ってからの生活がどうなのか気になるところです。今回は、NHKテレビのカンボジア取材に同行した、元在タイスタッフの上田広美に帰還民の様子を報告してもらいます。

レセプション・センター

バットアン郊外のオタキ・レセプションセンター。毎週金曜日の午後には、タイ国境からの帰還民1200名と家財道具を乗せたバス・トラックの隊列が砂埃を舞い上げてやってくる。十数年ぶりに祖国に戻った帰還民にとって、オタキは中継地点にすぎない。オタキ到着の翌日から、人々は外出して肉親や知人を探し始める。帰還開始当初に比べると、タイの難民キャンプにいた間に、何らかの方法でカンボジア国内と連絡をとっている人が多く、土曜、日曜の2日間ではほとんど全員が肉親や知人の所在を確認して、月曜日には最終目的地の申請を行ない、規定の1週間の滞在を終えてこのオタキを去ってゆくという。毎週同じ手順が繰り返され、帰還民はそれぞれの定住先へ散り散りになる。新しい生活を目前にした人々の顔には期待と不安が入り交じっている。

定住地を追われた帰還難民

オタキを出た人が全て最終目的地に落ち着けるわけではない。オタキの北西に位置するポプル郡では、1993年が明けて以来、クメール・ルージュ軍とプノンペン政権軍との戦いが続いている。砲弾に襲われた村人たちは、刈り入れす



What life is awaiting returnees?

カンボジアの未来に何が待ち受けているのか? (写真提供: I)

前の田を残して命からがら逃げ出してこざるを得なかった。この避難民の中にはタイから戻ったばかりの家族もいる。

「やっと親類を尋ね当て村に帰り、家建てたばかりだったのに、全部焼けてしまった」という女性は幼い子どもを抱いていた。「帰還先の村に辿り着いてもいないのに、こんなことになってしまい、あてもなく待たされている」という一家もいた。小学校の校庭に杭を打ち、青いビニールシートを屋根代わりに張って地面に寝起きしている人々。1年分の米を灰にしてしまった村人と、行き場を失った帰還民。

不安を残す定住後の生活

無事に定住できた人たちはどうだろうか。オタキ南方に点在する帰還民の定住村は、一目でそれとわかる。真新しい家がほとんど間隔をあけずに、びっしりと並んでいるのが目印である。

タイの難民キャンプで狭苦しくプライバシーのない環境に愛想が尽きたはずの人たちが、こんな風に寄り集まって暮らさなければならないのは、何を恐れていることだろうか。

定住村の一つ、オマル村で1992年4月に帰還したという20代の女性に会った。

「夫と3人の子どもとここに落ち着き、家を建てました。UNHCRが用意してくれた農地はここから3キロくらい先にありますが、家族ごとにもらえたのではなく、この村にきた人が共同でその土地を耕すよう言われました。雨が降らなかったせいか1年が干ばったけれど、ほんのわずかな米しかできず、みんなで分けたら何もないのと同然でした。この1年間はUNHCRの配給があったので何とか暮らしましたが、次の3月が最後の配給です。今年もUNHCRが種籾をくれるかどうか。もし今年も米を作るにしても、収穫まで食べるものがないのです。財産もないし、頼れる肉親もいないし」

1枚だけ残っている配給切符を見せてもらった。この紙切れと引換えに40日分の米と魚と油を受け取ったら、この先何の保障もないのに、彼女は将来の生活について何も考えられない。ただ、無気力な声で「どうしたらいいのかわかりません。そのときになったら考えます」と繰り返すばかり。

これから始まる生きる闘い

帰還して最初の1年は、タイの難民キャンプにいるのとは大差ない配給生活だった。配給が切れてはじめて、生きるための本当の戦いが始まる。10年以上も援助づけにされ、自主性を奪われてきた人たちにとって、厳しい日々が続くに違いない。オタキに到着した人たちの顔にあった期待が、この村では1年の間に消えてしまっていた。この村にあるのは、国境の難民キャンプであまりにも頻繁に目にした諦めの表情。「平和」になったはずの祖国にやっと帰ってきた人たちは、希望の光が見える所まで、まだ更に長い道のりを歩かなければならないようだ。

Reception Center

With general elections due in May, Cambodian refugees are coming home. 285,166 people returned as of Feb.5, 285,261 of them from Thailand. They can hardly expect peace at home. Former Thai staff member Hiromi Ueda reports on the returnees.

Buses and trucks with 1200 returnees arrive from Thailand at Otaki Reception Center in Battambang every Friday. For them, back home after 10 yrs. of absence, this is not the end. The next day, they begin to search for their family and friends. Many of the recent returnees reportedly got information from sources in Cambodia beforehand. So they mostly succeed in the searching over two days, leaving here after a 1-week stay. The same process continues every week, and each returnee heads for a final destination. With a new life ahead, I can see both expectation and worry on their faces.

Evacuation from Settlement

All returnees cannot settle at their final destination. In Boble, north-west of Otaki, fighting started this year between Khmer Rouge and Phnom Penh Government forces, villagers, including returnees from Thailand, had to evacuate, leaving their harvest behind.

I saw a woman whose new house was completely destroyed, and a family who were involved in the battle on arrival. People built a temporary hut on school grounds to sleep in. The rice crop was burned to ashes, and returnees had no place to go.

Uneasy Life Awaiting

How about returnees who could settle safely? Villages of returnees, located south of Otaki, can be easily found because their new houses are closely packed together. Returnees must have been disgusted with the crowded Thai refugee camps with no privacy at all. Are they scared of something to live like this?

I saw a woman in her 20s, who returned to Omal village in April '92. She settled there with her husband and 3 children. Farmland prepared by UNHCR (United Nations High Commissioner for Refugees) was 3km away, shared with other villagers. The harvest was too small because of dry weather. They have somehow lived through it so far with rations from UNHCR, which will last only until March. She expects UNHCR to give seed rice again this year. But even if they can grow rice this year, they have nothing to eat until harvest time, with no fortune, nor relatives to rely on.

She showed me only a food stamp she still had. She can receive 40 days' worth of food with this, but have no guarantee afterward. However, she couldn't think of the future, just repeating in a weak voice that she had no idea what to do.

Fight to Live

Life of returnees for the past year was not so different from life in Thai refugee camps. Rations will be suspended soon, on which a fight for them to live will really start. They have lived just on aid for 10 years, their independence lost completely. So life ahead must be hard. The expectation seen on returnees' faces at Otaki, can be found no more. All I can see here is disappointment, I saw this all frequently at refugee camps. Back home, expecting peace, they still must go a long way to make their dreams come true.



HIGH SPOTS

アンテナ

関西発

「日本の中のアジア子ども文化交流会」でパネル展示



1月6日(水)、大阪・森ノ宮のピロティーホールで、アジアハウス(代表:重慶子さん)主催の「日本の中のアジア子ども文化交流会」が開催され、CYR(幼い難民を考える会)関西グループはパネル展示という形で参加。昼の部が800人、夜の部が500人と大勢の方々に来ていただきました。

舞台では、日本に住みながら中国、朝鮮半島、アイヌ、琉球、ラオスの文化を継承する子どもたちが踊りや演奏を披露。アジアハウス子ども劇団は、フィリピンを絡ませて「豊かさ」「ゴミ・環境問題」を鋭く問いかける劇を舞台狭しと演じていまし

た。ゲストに「ひらけポンキッキ」の山川まゆみさんが登場し、会場の子どもたちも一緒に合唱するなど盛り上がりました。夜の部ではそれぞれ保育経験もある「トラや帽子店」の3人が、保育の現場で歌えるような動きをつけた軽快な音楽を楽しませてくれました。アンコールでは手話を取り入れた「明日が好き」を熱唱し、会場のあちらこちらで手を動かす姿が印象的でした。CYRとしてはパネル展示ということで、直接の反応はなかったのですが、パンフレットなどはすっかりさばけたのでこれから反響が届くのでは、と期待しています。「また、やりたいね」が皆の感想でした。

(佐々木三千弘・会員)

岡山発

タイへメンバー派遣

何ととっても近頃のヒットは、岡山からタイのCYR宿舎兼事務所のあるアランヤプラテートに井奥雅樹さんを派遣したことでしょう。年末にCYR岡山自慢の名物男「岡やん」こと井奥さんは、カオイダン・キャンプからの引き揚げ(CYRのカオイダンでの活動は92年11月で終了)とアランヤプラテート事務所の引越という大事業を駐在スタッフと共に、その絶大なパワーでやり遂げました。そのためか無敵の食欲もさらに如何なく発揮され、CYRタイ・スタッフのピアアップさんも高田美江子さんも手料理を作り疲れ



るほどで、ついに屋台で外食しようということに。

タイの村の保育所の子どもたちは井奥さんの姿を目にし、スタッフに「どうしてあんなに大きいの?」「どうして太ってるの?」と。そのうちにウワンチャン(太っちょ象さん)とかチャン(象)先生と呼んですっかりなつき、象さんに乗るごとく四つん這いの象先生の上にワーツとてんこ盛りに群がったりととっても気に入ってくれました。そんなあんなで「ウワンチャンは前世は人ではなかったのでは?」とCYRスタッフのブットさん。これを機会に、岡山とアランヤプラテートは便りを出し合っています。今も「チャン先生はいつ来るの?」と子どもたちは覚えているそうです。

(小川輝樹・会員)

福山発

人々の自立を目指して、共に

1月31日にCYK(CYRのカンボジアでの活動部門)スタッフ、ビムワリーさんと野村美知子さんに、カンボジアでの活動報告をしていただきました。お話の中で私の一番の関心事は「主役=自分たち」という自覚を持ってもらえる援助をするには、どうしたらいいか」でした。単に人・物・技術を持ち込むだけでは依存症を引き起こし、い

つまでも大国に翻弄され続け、援助が自己満足で終わってしまう可能性があるからです。この問題についてもお2人とも充分配慮されていて、CYRとして多面的に活動されている、とのことでした。特にお2人が強調されていたのは、以下の2点でした。

まず、常に自分で考え、工夫し、行動するということを繰り返すことにより、自分たちで考える習慣を身につけるように。そして、CYKのモットー「カ



ンボジアの状況から各個人の思い等、常に話し合うことにより、どのようにしていくのがカンボジアの人々にとって良いことなのか、お互い理解し合う」ようにしている。

「福山にもNGO(民間団体)を作ろう!」という声が出始めています。活動内容等まだまだ未定ですが、この2点を忘れず、人々の自立を目指して、共にカンボウ! (曾屋智恵美)

From Kansai

Panel Display at "Cultural Exchanges for Children of Asian Nationalities Living in Japan"

The above event was held Jan.6 at Piloti Hall, Morinomiya, Osaka. It was organized by Asia House(represented by

Keiko Shige). A Kansai group of CYR(Caring for Young Refugees) displayed panels. The event attracted 13,000 visitors in all. On stage, children of origins like China, South Korea, North Korea, Laos, Okinawa, and the Ainu all living in Japan, performed their own dances and music. Children of Asia House troupe performed a play on affluence, garbage and environment problems. Mayumi Yamakawa, T.V. personality, attended as a guest and sang together with the children. At night, a group of three members with nursing experience introduced children's songs with choreography, followed by an encore song accompanied by sign languages. I was impressed with the sight of people moving their hands to the song. No leaflets were left over at CYR display section. We are looking forward to people's comments on our display. Everybody says they want to do it again.

(Michihiro Sasaki)

From Okayama

The biggest event recently in Okayama was the dispatch of Masaki Ioku to Aranyaprathet, the site of CYR accommodations and office in Thailand. Ioku, nicknamed "Oka-yan", visited there to help CYR local staff withdraw from Kaoh-I-dan camp by Nov.'92 and to move the Aran office. His energetic activity was supported by a good appetite, which exhausted Pheap and Mieko Takada, in charge of cooking. The staff eventually decided to eat out, but no sooner than dishes were put on the table than Ioku used his chopsticks. Astonished staff just looked at empty dishes and Ioku's face.

At first, local children asked why he was so big. They soon called him elephant and always surrounded him. Poot even

said Ioku might have been an elephant in a former life. Taking this opportunity, we have been exchanging letters directly with the Aranyaprathet staff. We hear children are looking forward to seeing Ioku again. He will certainly visit there, when he raises enough money.

(Teruki Ogawa)

From Fukuyama

For People's Independence

Pimwalee Nisawattananan and Michiko Nomura, both CYR staff, reported Jan.31 on their activity in Cambodia. What interested me most was the importance for local people to be independent. Providing human resources, goods and technology alone may make them dependent on the mercy of major powers, with aid ending in complacency. They both said that CYR's activities cover many fields, giving consideration of this fact. Details are available in the CYR News, but the following points were stressed in their report.

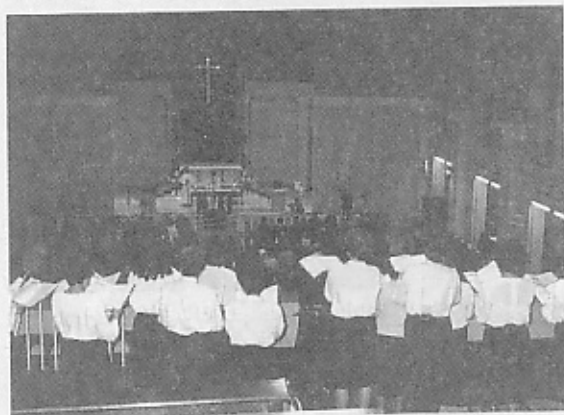
1. To always think and carry out things for themselves until it becomes a habit.

2. To discuss everything from Cambodian situations to personal opinions in order to deepen mutual understanding on the best way to extend help. These two points are lacking in what is offered by the Japanese Government as aid. Voices are mounting to establish a NGO in Fukuyama. Details are undecided, but we will do our best for the self-independence of local people, with these points in mind.

(Chieme Soya)

聖心女子大学聖堂でミサ 「幼い難民を考える会のために」

グレゴリオ聖歌を中心に合唱している Cantate Domino のメンバーの方々による「幼い難民を考える会のために」と題するミサが聖心女子大学聖堂で行われました。12月8日、静かな雰囲気の中で、グレゴリアンによる「無原罪の御やどりの祝日」が合唱され、多くの方が耳を傾けていました。この日の献金347,099円全額をご寄付戴きました。厚く御礼申し上げます。



Mass at the Univ. of the Sacred Heart Church
"For Caring for Young Refugees(CYR)"

Mass for CYR was held Dec. 8 at the church of the Univ. of the Sacred Heart. During the mass, Cantate domino performed Gregorian chants. The 347,099 yen which was collected at the mass was later contributed to CYR. We deeply appreciate this contribution.

ほのぼのとした チャリティー・コンサート

詩人の山本^{やまもと}櫻子さんが1月24日、新宿モーツァルトサロン（東京）でチャリティー・コンサートを開きました。CYRのために開かれたも



ので、山本さんの第1回めのコンサートです。山本さん作詞の童謡の合唱、そして詩の朗読という、ほのぼのとしたプログラム。これからも、年に1回、コンサートを開かれて行くそうです。また、山本さんは群馬県川場村に「詩と童謡館」を建設中で、今年の秋にはオープン予定。

詩作品、世界の楽器などの展示物、ゲームコーナー、コンサートの催しなど、楽しい建物に。

世田谷区の鎌田郵便局長でもある山本さんは、郵政省貯金局営業課長（前郵政省ボランティア貯金推進室長）の熊谷豊氏の紹介でボランティア貯金の寄付金配分団体の1つ「幼い難民を考える会」へ同コンサートの純益88,000円をご寄付くださいました。厚く御礼申し上げます。山本^{やまもと}櫻子さんのプロフィール

世田谷鎌田郵便局長。NHK学校音楽コンクールの課題曲を始め、自由曲の作品多数。小・中学校・高等学校の校歌も多数。詩集「笹舟」、「透明な二月の少年」、「花びらの耳に」、「白樺の葉がしげることを」など。その他、CD、レコ

ア活躍中

ードなども数多い。

Heartwarming Charity Concert

Yoko Yamamoto, poet, held a charity concert for CYR Jan. 24 in Shinjuku, Tokyo. It was her first concert, composed of children's songs and poems. The heartwarming concert will be held once a year in the future. In addition to being a poet, Ms. Yamamoto is also a planner of the museum of Poems and Children's Songs, now being constructed in Kawaba vil., Gunma. It will open this autumn, and future concerts and displays of her poems and overseas musical instruments.

Ms. Yamamoto is the head of Kamata Post Office in Setagaya. She learned about CYR through Yutaka Kumagai, Business Div. Chief, Postal Savings Bur.(formerly Voluntary Deposit for International Aid Office. Chief), Min. of Posts and Telecom. She donated the net profit of the concert, 88,000 yen, to CYR, designated as one of the organizations to be allocated contributions collected via Volunteer Savings sponsored by the Ministry. We heartily appreciate her donation.

Ms. Yamamoto wrote the words of many songs chosen for the NHK music competition for students, as well as many school songs. She also wrote poems like "Sasabune"(Bamboo-leaf Boat), and the words of many songs released on record or CD.

クリスマス・パーティー

12月20日、CYR(幼い難民を考える会)東京ボランティアのメンバーによるクリスマス・パーティーがありました。11月の交流会(ピクニ

ック)の参加者を中心に、約30名が集まりました。当初、在住のインドシナの人たちと仲良くなりたい、と始めた交流会でしたが、友だちの輪が広がってイランやアメリカの人も参加し、インターナショナルなパーティとなりました。当日はみんなでサンドイッチを作ったり、チーム対抗のゲームや隠し芸、と短時間ながら盛りだくさんで楽しいひとときでした。

Christmas Party

CYR(Caring for Young Refugees) members in Tokyo held a Christmas Party on Dec. 20, attended mostly by those who joined the picnic in Nov. Our events were originally aimed at promoting exchanges with Indo-Chinese people in Japan, but the Christmas party became international with the presence of Iranian and American people as well. We had a good time, making sandwiches and playing games.

ボランティアグループ 「てくてく」発足

CYRの東京ボランティア・グループ「てくてく」が発足。お料理会をはじめ、交流会やイベント、翻訳、発送作業、その他CYRを側面から支える様々な活動をしています。毎月第3木曜日午後6時から説明会を行なっています。一度、お気軽に顔を出してみませんか。

Volunteer Group "Tekuteku" Inaugurated

Some CYR members in Tokyo have started a volunteer group called "Tekuteku," aimed at supporting CYR in events, translation, and other activities. You are free to attend a briefing session from 18:00, held on the third Thursday of every month.



読者便り

Letters From
Readers

●何かお役に立てることは

船橋市 若林宏子

新聞紙上やテレビ等で、若い難民のおかれた状態を目の当たりにし、1人の母親として、人間として、無理なく心からお役に立てることはないかしら、と思いつけておりました。

●真剣に学び、活動を

岐阜県 山本邦光

私が難民問題に関心を持ったのは、小学校の頃、インドシナ難民がニュースなどで取り上げられた時からです。世界各国からいろいろなボランティア団体が参加しているのに、日本の活動が消極的だったことに、ショックを受けたのを、今でも思い出します。高校時代、1週間ほどタイのパナニコムに慰問した経験もあり、その時、出会った若い難民のために何かできないかとずっと考えていました。高校を卒業して、カナダに1年、アメリカに2年留学していました。いろいろ考え、難民問題をはじめ途上国について真剣に学び、活動してみたいと思い、今年の9月からアメリカのバーモ

ント州にある大学で国際学を学ぶつもりです。現在、学費をためるために、日本でアルバイトをしています。

●考えさせられたこと

東京都 木村美光

高校生にとっての難民(本誌30号掲載)を読み、共感したり、いろいろ考えさせられました。

第1に、日本人のボランティアは、お金や物を援助するだけでなく、心のこもった援助をしていないのではないかということ。第2は、難民になる事情はいろいろあるにしても、それぞれの地域には、その地域の人々の生活があり、同情するというのはどこか違うのではないかと。第3は、いろいろ差別を受けても、日本人を憎んでいないラオスの女の子は、僕たちよりずっと心豊かで大人だと思う。今の日本は、本当の意味で幸せとは言えないのではないかと。こんな状態の日本なら、難民の人たちに見せたくないし、見せない方がいいと思う。

カンボジアという国(クメール文化)、また、ソマリアにしても、人間として非常に優しい、明るい人たちなのに、なぜ、戦わねばならなかったのか。しかも同国人で。外国の影響が災いしていると思います。

経済学の根本は欲望だと教えられたことがあります。経済の発展が戦争にかりたてるなら、経済の発展はあまり歓迎されるものではないのかもしれませんが。自然破壊も経済競争をもたらす

ていると考えられます。

なぜ、人間はほどほどにしておくことができないのでしょうか。昔の人たちのように、自然に対する感謝と謙虚な心を学ぶ時期にきているのではないかと思います。

一昨年、旅行がきっかけで江戸時代末期のことに興味を持ち、勉強を始めました。この時代の日本人は、鎖国というハンディを負いながら、礼儀正しい聡明な武士たちが海外との交渉を正々堂々としています。一般市民も教養の高い人たちが多く、完全な独立国として認められるようになりました。このことに誇りを感じます。

これらの立派な人物が育った背景には、日本人の向学心があると思います。いかに、学問が大切であるかが理解できます。ある高校生の今の日本を見せたくないという意見は、何か教育の方向が間違っているのではないかと思います。

それに援助の方法にしても、ただ与えるだけでは、かえって相手を駄目にしてしまいます。第2次世界大戦後、日本はアメリカの援助を受けました。しかし、ただもらうだけでなくギブ・アンド・テイクの精神があったのではないのでしょうか。PKOで自衛隊が道路補修をしている様子をテレビなどで見ますが、カンボジアの人はただ見てるだけです。なぜ、自衛隊の人たちは補修の方法を教えられないのでしょうか。

そういう意味でも、CYRが、

幼い子どもたちに教育活動をしていることに、賛同しています。独力で再建できるようになるまで教育することが、本当の援助といえるのではないのでしょうか。

そのうちに、日本人が新たに学び、教えられることの方が多くなると思います。

なにか、まとまりのない手紙になってしまいましたが、皆様、今後がんばって、ご活躍ください。

To Be a Helping Hand for Refugees

Hiroko Wakabayashi,
Funabashi City

By reading newspapers and watching TV, I have learned of the miseries young refugees are facing. I have been wondering, as a mother and as a human, what I can do to help them.

Learning Hard for Future Activities

Kunimitsu Yamamoto,
Gifu Pref.

When I was a child, news on Indo-Chinese refugees roused my interest in refugee problems. I was shocked at the activities of Japan, compared with the more positive activities of volunteer groups from other countries. Later, as a high school student, I visited Thailand and met little refugees. Finishing high school, I studied in Canada and the U. S. for 3 yrs. in all. Based on these

experiences, I've decided to study developing countries and their refugee problems, and to be engaged in this field in the future. I am earning school expenses in Japan to attend a college in Vermont, U. S. from this September.

What I Thought

Yoshimitsu Kimura, Tokyo

I sympathized with your article for high school students (in the 30th issue) on refugees. The article made me think of various things.

First, Japanese volunteers fail to extend true help, just providing money and goods instead. Second, we should not feel pity for refugees, since each person lives a different life peculiar to each region. Third, I think the Laotian girl is much more generous and mature than we, as she doesn't hate the Japanese despite the discrimination she received. Japan today is not happy in a true sense, which we had better not show to refugees.

Though kind and cheerful, people in Cambodia and in Somalia fight each other. This may partly be due to influences from foreign countries. I was once told that economy is based on desire. If economic development, related also to natural destruction, drives people to war, it may be unwelcome. Why can people not be satisfied at a

moderate level? Now seems to be a time to face nature with gratitude and modesty, as we used to.

I've studied the late Edo period for 2 yrs. Samurai then were polite and wise enough to negotiate squarely with foreigners, despite Japan's isolation. In addition citizens were well-educated, resulting in Japan's recognition as an independent state. I am proud of this fact and think it was supported by people's interest in study. A high school student said Japan is not worth being shown abroad, indicating education today is heading in the wrong direction.

Giving aid blindly, however, will have a negative effect. Japan was provided aid by the U.S. after the War on a give-and-take basis. But Cambodian people just look at PKO. They should learn how to repair roads, for instance, from SDF personnel.

Therefore, I Sympathize with CYR efforts to educate children. Aid is achieved only when people are educated enough to reconstruct for themselves. Then, Japanese people may learn from them in the future.

Before concluding my letter, I would like to wish you success in your future activities.



僧侶が歩けば

.....その5

——タイ、カンボジア行脚の旅 洪井 修

解散、そして強硬突破

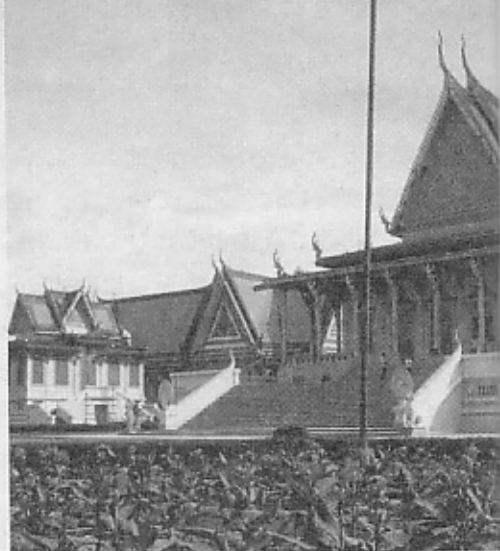
カンボジアの正月が終わり、再び日本語教室のことで大僧正を訪ねたが、結局、今の政府の方針が、まだ日本語を許可しないとのことで、大僧正の力ではどうにもならないということだった。昨年募集した生徒には事情を話し、一応この会は解散することにした。

だがここで、はいそうですかと、ひっこんでしまう私ではない。再び日本語教室を開くための申請書を、今度はルナセイ（ヘンサムリン政権の本部）ではなく、プノンペンルナセイに持って行った。

しかし、完全な門前払い。今のカンボジア政府がどんな政府か、各省庁がどうであるか、だいたいことはわかる。もうそういう機関に頼っても仕方がない。その日の内に、ウナーロム寺の私の部屋のそばで遊んでいた女の子を6人呼んで、日本語教室を開いてしまった。たまたま、そこで偶然遊んでいた女の子たちである。私はこの門前払いの日を、屈辱の日と名づけ、どうしてもこの日に日本語教室を開きたかったのである。5月6日がその日である。この女の子たちに、1時間、何もわからなくていいから、あ、い、う、え、お、と教えた。

翌日、昨日の子と以前から勉強したいと言っていた女の子と合わせて13人、さらに寺内の学生5人、全部で18人でスタートした。しかし、仮に政府の弾圧で、日本語教室を閉じなければならぬ時のことを考え、私が男の子を養うことにした。これなら身内も同然。日本語教室を閉じても、手元にいる男の子は確実に教えられる。さっそく、学生、知り合いの坊さん、友だちに探してくれるように頼んだ。

日本語を教えてから1週間目、私の予想通り

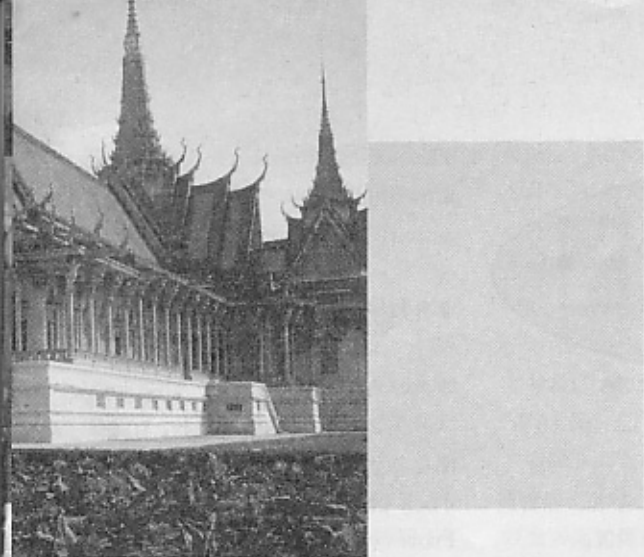


に来るべきものが来た。ルナセイの役人である。歳の頃、32、3歳、ひげのないナマズのような顔をした役人だった。日本語を教えることは許可しない。だが、今の状態に関しては何も言わない。だから、勉強中はなるべくドアや窓を閉めて声が外に漏れないようにしてもらいたい。それから、実は私も勉強したいのだが入れてもらえるだろうか。一挙に腰が砕けた。子どもを養うことについては問題はないということで、まあとにかく、一件落着である。

教室、そして子ども探し

昼間は子どもたち13人、夜は寺に寄宿している学生6人。生徒たちの中にはあのナマズ男もいる。ところが、ナマズ男は夜の授業に2回来ただけである。昼間の授業には時々顔を出す。授業を受けに来るのではなく偵察なのである。今の政府が一番恐れているのは、私のような人間が青年たちを集めて、反政府教育をして、革命を起こすのではないかと。バカな！ 私がカンボジアに来てまで、そんなことをするなら、もっと利口な方法を探るよ。

困ったことが起きた。ルナセイの宗教担当の係官が、女性職員2人を教えてくれと言いに来た。ただでさえ時間がないのに、これ以上時間は割けない。それで条件を付けた。3週間たったら試験をする。それで受かったら、本格的に教えるということだった。3週間が過ぎ、いよいよ試験。この時、子どもは7人、青年大人グ



グループは11人になっていた。結果は子どもグループ4人が落第。青年大人グループは2人が落第。落第生はその場でやめてもらった。残ったのは12名であった。

ここでいったん授業を1週間休みにして、養育する子どもを探しに出掛けることにした。子どもはシエムリアップ県、コンボンチャーム県、コンダール県とプノンペンから選ぶことにした。シエムリアップ県は友だちの坊さんが行ってくれることになった。

私は学生とコンボンチャーム県に行った。昨年行った時は所々道が壊れ、徐行運転を余儀なくされたが、今回は簡易舗装ではあるが、道はしっかりしていたので、オートバイで60キロ平均くらいで飛ばすことができた。朝6時半に出て、9時45分にはコンボンチャームの町に着いた。すぐに渡し舟に乗り、対岸の町に渡り、そこからまたオートバイで30分くらい行き、小さな川を渡し舟で渡ると、学生の故郷コーサテンの村。学生の家日本語を学びたい子どもを集めてもらうことにした。噂は噂を呼び、隣村からも2つ3つ先の村からも、100家族ちかくも集まってしまった。順番を決めるだけでも大騒動である。7人選んで、最後はくじびきで決めた。リナートちゃん、小学校3年生、11歳である。父親と会い、7月1日から日本語の勉強を始めるので、それまでに連れて来て欲しいと言った。

プノンペンでは、イエーイ（三戒、五式を守って、寺で食事をしている年とった女性）が子

どもを連れてきた。ソムオンちゃん10歳、小学校3年生。

友だちがコンダール県から子どもを連れて来た。身体は小さいが目はパッチリ。質問にもてきばき答える。名前はビスット、6年生、12歳である。シエムリアップから来たのはポンちゃん、2年生11歳である。これで全員そろったことになる。子どもたちと青年、いっぺんに10人の家族、これだけ養うのに、1カ月いくらかかるだろう。

いよいよ、これからが本番

カンボジアでは6月が学年の年度末で、9月が新学期なのである。7月になってもリナートちゃん来ない。困ったものだ。2週間してようやくリナートが来た。親戚の人5人で来たのだが、こたごたと説明するだけで、素直に謝らない。完全に自分たちに責任があると認めさせた上で預かることにした。

3週間教えて15名を試験したが合格したのは7名。リナートは遅れていたのもう1週間教えて再試験をすることにした。だが残念かな、9名受けて合格した子は1人もいないのである。

リナートはこの時点でやめてもらうわけにはいかない。あと、何名教ってやるかが問題だ。子どもの家庭事情がよくわかっている子もある。両親が日本語を学ぶことに期待していることもある。しかし、落ちた子は自分のいたるなさを自覚してもらわなければ…。でも、外国語を学ぶのはむずかしいから。子どもの将来を考えると…。いろいろな考えが頭に浮かび、なかなか結論が出ない。翌日、前の日とはうってかわって、暗々としたもので、昨日のもやもやがまるで嘘のようである。起きるとすぐに何の戸惑いもなく、3名の合格者を決め、それ以上何も考えなかった。実にあっけらかんとした態度であった。

これで子どもグループ14名、青年大人グループ9名、合計23名で体制が固まり、いよいよこれからが本番である。

CYRきのう・今日

Yesterday, Today

In Thailand

タイ・カオイダン難民キャンプ Khao I Dang Refugee Camp

2月23日 Feb.23

本国帰還を望まない難民と妊産婦、病人 800名を、タイ軍と国連がサイト2 キャンプへ移送。

800 refugees who rejected repatriation were transferred to Site 2 Camp by Thai troops and U.N. officers.

3月2日 Mar.2

帰還を希望する難民は、すべてカオイダンを出る。キャンプに残された家の一部が燃やされる。

All the refugees who wished for repatriation left Khao I Dang. Some abandoned houses at the camp were burned.

3月3日 Mar.3

カオイダン閉鎖式典。タイ軍、帰還民、国連帰還担当長などの挨拶の後、風船と鳩を放ち終了。この日の帰還者199名。

Closing ceremony for Khao I Dang Camp was held. 199 refugees returned home.

3月30日 Mar.30

サイト2閉鎖。すべてのカンボジア難民キャンプが閉じる。

Site 2 Camp, the last camp for Cambodian refugees, was closed.

タイ・プラチンブリ県 アランヤプラテート郡

Aranyaprathet, Prachinburi Prov.

12月4日 Dec.4

乾期の水不足が深刻になり、保育所の野菜畑に水タンクを設置。

Water shortage due to dry season worsened. Water tank was set in the nursery's vegetable garden.

1月9日 Jan.9

パライ村保育所で「子どもの日」の催し物。130名の子どもや住民がゲームなどで楽しんだ。

A "Children's Day" party was held at a nursery in Parai vil. and attended by 130 people.

1月20日～2月1日 Jan.20-Feb.1

アランヤプラテート郡(アラン)の保育所12か所を調査。

12 nurseries in Aranyaprathet(Aran) were researched.

1月26日 Jan.26

タイ国境警備隊へ、タイ国境村入出許可書を申請、受理される。

Thai border guards accepted application for entry into and departure from border villages.

2月2日 Feb.2

パライ村保育所に通う子ども31名の家庭訪問を開始。3月終了。

Home visits for children attending a nursery in Parai vil. started, these visits ended in March.

2月24日

アラン郡役所地域開発局で会議。保育所の調査報告をし、3月からアラン郡ノンブルー村保育所での活動開始を決定。

この他、アラン郡タブリック村・コクサベーン村でも活動開始。

The nurseries research report was presented to Aran authority, and activity in Nongprue vil. was decided.

2月23～27日 Feb.23-27

ロイ・エット県での農業研修にスタッフのレックが参加。

スーリン県で保育所、小学校、有機農園などをスタッフが見学。

Took part in agric. training in Roi Prov. visited facilities in Surin Prov.

3月22・25日 Mar.22-25

パライ村・ノンブルー村の家にスタッフが宿泊研修。

Staff stayed at home in Parai and Nongprue vil.

In Cambodia

カンボジア・ブノンペン市 サムロンクロム村

Samrong Khrom Vil., Phnom Penh

12月12日 Dec.12

テッカボンヨ小学校の改築資金を集めるため、住民が「ブン・プカー(仏教儀式)」を開催。募金額は57,000円。Residents held fund-raising Bhuddist service to reconstruct school, collecting 57,000 yen.

1月 Jan.

健康教育プログラム開始。人形劇などを使って、母親や子どもに栄養や健康などの知識を普及。

Health program started to spread knowledge on nutrition and health.

1月13日 Jan.13

保育所で受け入れる子どもを、35名から50名に増やす。住民の要望に応えたもの。

The number of children accepted by the nursery was raised to 50 from 35 at the request of residents.

2月 Feb.

住民が保育所運営委員会を設置。
Residents set up nursery steering committee.

2月28日 Feb.28

保育所に2つめのトイレを作る。父母も協力。

2nd toilet was installed at the nursery.

3月24日 Mar.24

カンボジアの通貨が暴落を続け、1ドル=3,700リエル(昨年同時期1ドル=約800リエル)。米など食料の値も2~3倍になり、保育所給食の予算を増やす。

Local currency fell to 3,700 riels to U.S. dollar(800 riels, same period, last year). Food expenses rose so an increase in the nursery lunch budget was allowed.

カンボジア・カンダール県 プレイトウ村

Prey Ta Touch Vil., Kandal Province

12月13日 Dec.13

住民が、保育所の建物と井戸の平穏を祈願する仏教儀式を主催。

Residents held Buddhist service for nursery facilities and wells.

1月 Jan.

物価上昇と物不足で、保育所給食用の豚肉を村の市場で購入できず。代わりの食料を使用。

Pork for nursery lunch which couldn't be purchased due to price hikes and goods shortages was substituted by other food.

1月16日 Jan.16

住民の要望で、タイスタッフがタイ農村の現状と農業技術を説明。20名が参加。ゲームを取り入れ、和気合い合いと行う。

Thai staff talked of status quo of Thai farm villages and technology used there at the request of resi-

dents. 20 people attended.

2月5日 Feb.5

収穫祭の儀式を住民が保育所で祝う。大勢の人々が集う。

Many villagers attended harvest festival at the nursery.

3月20日 Mar.20

SVA(曹洞宗国際ボランティア会)から寄付された中古衣料を利用して、子どものパンツやスカートを縫う講習会実施。母親40名が参加。

40 women were taught how to sew children's wear with used clothes donated by SVA.

3月27日 Mar.27

村に住む、数か月の赤ちゃんが栄養失調による衰弱などで死亡。母親を集め、応急手当のトレーニングを実施。Babies in the vil. died of malnutrition. Mothers learned about first aid.

In Japan 国内

12月31日 Dec.31

NHK ラジオ第1「私が見た世界」。事務局峯村が電話インタビューで活動を紹介。

Tokyo Bureau Director Minemura introduced CYR activities in a phone interview on the NHK radio program, "World I Saw."

1月13日 Jan.13

東京の「駒場幼稚園母の会」で事務局山崎が活動報告。

Tokyo staff Yamazaki reported on CYR activities at the "Mothers Ass. of Komaba Kindergarten," Tokyo.

1月26・30・31日 Jan.26,30-31

カンボジアスタッフ野村美知子、ピムワリーが講演。東京 神戸 広島にて。Michiko Nomura and Pimwalee Nisawattananan, both Cambodian

staff, gave a lecture in Tokyo, Kobe, and Hiroshima.

2月5日 Feb.5

長野のボランティアグループ、「マイトリーしなの」で事務局峯村が活動紹介。

Dir. Minemura introduced CYR activities.

2月13日 Feb.13

東京女子大学ボランティアフォーラムで、会員の鳥栖さんが活動紹介。また、「岡山県教組女性部学習会」で、岡山支部の小川さんが活動紹介。

CYR activities were introduced by member Torisu at Tokyo Women's Christian College forum, and by Ogawa of Okayama group at meeting of Pref. Teachers Union.

2月27~28日 Feb.27-28

関西支部主催「竹の子セミナー」。於神戸。会員・関係者13名出席。関西に住むインドシナ定住者の現状と問題等を学習、情報交換。

"Takenoko Seminar" was held in Kobe by Kansai group, and attended by 13 people. The seminar looked into the status quo of Indo-Chinese people living in the Kansai area.

3月3、6、27日 Mar.3,6,27

柏ユネスコ協会、および千葉と神奈川で事務局峯村が活動紹介。

Dir. Minemura introduced CYR activities at Kashiwa UNESCO Assn. and two other events in Chiba and Kanagawa.

3月21日 Mar.21

東京でベトナム料理会。献立は肉だんごと、ふわふわクレープ。

A Vietnamese food party was held in Tokyo, featuring meat balls and crepes.

「いただきます!」＝ベトナム料理の巻

Thit.kho Trung

(ティコチュン)

玉子と豚肉のコーラ煮

材料 (5人分)

玉ネギ 5個

コーラ 1本

豚肉 (もも) 500g

しょうが、正油、こしょう、塩、
各少々

作り方

- 1) 玉子をゆで、むいておく。
- 2) フライパンに油をたっぷり
しいて、玉子を表面が黄色くなる
までいためる。
- 3) 肉を玉子1個の半分位に切
りわけ。
- 4) 玉ネギをみじん切りにして
(2のフライパンの油を大さじ
1位残し) いためる。
- 5) 4へ豚肉を入れ火が通った
ら、砂糖 (大1)、塩 (小1)、



こしょう、正油 (大5)、ちやわ
ん1杯の水を入れ、沸騰したら
コーラ1本を注ぎ、10分位煮る。
6) 玉子を入れ3分位煮て、で
きあがり!!

幼い難民を考える会(CYR)とは＝What is CYR (Caring for Young Refugees)

営利を目的としない民間の組織で、特定の政治・宗教団体との関わりはありません。私たちの願いは、子どもたちがどこの国であろうと、健やかに育つことです。カンボジア難民の流出を
CYR is a non-profit private organization with no relations with specific political or religious organizations. Our wish is for children to grow in good health, regardless of nationality. CYR was inaugurated in Tokyo in 1980, when Cambodian refugees

きっかけに、1980年に東京で発足したCYRは、以来13年間、タイで、日本で、カンボジアで、インドシナ難民の子どもたちとともに歩んできました。

「幼い難民を考える会」の名のdrew worldwide attention. For 13 years since then, we have helped In do-Chinese refugee children in Thailand, Japan, and Cambodia. Deserving the name, "Caring for Young Refugees," we have tackled refugee problems and practiced international coop-

通り、難民の問題を考え、人の相互理解を基本にすえ、国際協力を実践してきた私たちは、いまタイの難民キャンプで得た体験を生かし、人々を難民にしない世界をめざしています。

eration based on mutual understanding. Applying experineces gained at Thai refugee camps, we are working hard to realize a refugee-free world.

発行：幼い難民を考える会

発行人：深水正勝

編集協力：石井じゅん・佐藤真弓・長谷川容子・上田広美・大旗規子・小坂恵理・B.Archer・H.Sutherland.

東京事務局 〒160 東京都新宿区南元町6-2 TEL.03-3353-9947 FAX.03-3353-9739

バンコク事務所 V.V.U.Apt.23, 135 Soi Phayanak, Phayathai, Bangkok, Thailand TEL.215-0658

プノンペン事務所 No.32 V.430 Sangkat Psa Damtkov Chomkar Mon, Phnom Penh, Cambodia TEL.18-810261

関西 〒573 大阪府枚方市枚方元町4-32 メゾン花303 中野能行方 TEL.0720-43-3380

岡山 〒700 岡山市南方1-7-13 ほっと・すべす気付 TEL.0862-23-6884 FAX.0862-26-3085

事務局からのお知らせ：1月末、事務局広報担当の石井じゅんが退職。3月末事務局国内プロジェクト担当の山崎高枝が退職いたしました。新たなスタッフとして、1月より、遠藤浩が勤務、4月にバンコク事務所に赴任いたしました。また3月より、石塚和英が事務局に勤務、4月より、沼田マヤ子が事務局広報担当として勤務いたしました。どうぞよろしくお願いいたします。